

【一】次の1～10の各文の——部のカタカナを、それぞれ漢字に改めて答えなさい。

- 1 果物が暑さでイタむ。
- 2 書物をアラワす。
- 3 神仏をオガむ。
- 4 テンラン会に出品する。
- 5 部屋のタイシヤク契約を結ぶ。
- 6 原油をセイセイして灯油を作る。
- 7 ショウニ科を受診する。
- 8 コテイに沈んだ集落。
- 9 富士山は世界文化イサンだ。
- 10 ミンシュウが広場に押し寄せる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、原文には太字の箇所がありましたが、作問の都合で、文章全体の字体を統一しました。

そもそも①科学とは何でしょうか。

科学というと「法則」や「理論」、たとえば学校で習った「万有引力の法則」や「相対性理論」を思い出す人もいるかもしれませんが、私たちは法則や理論を「一〇〇パーセント正しい」と思いこんでしまいがちです。ところが、科学の法則や理論はどのような絶対的な真理ではないのです。

テレビ番組では「驚きの真実が明らかに！」という言い方をよく使います。こういう言い方をすると、視聴者は「一〇〇パーセント正しい絶対的な真実があるように思ってしまうから、私が担当する番組では「そういう言い方はしないでほしい」とお願いしています。人間の物の見方は完璧ではないのですから、一〇〇パーセント正しい真実を把握することはできません。そんなことができるのは、全知全能の神様だけででしょう。

科学も同様です。「真実は、もしかしたらあるかもしれない。ならば、少しでもそこに近づきたい」。科学とはこのように、限られた認識の手段を使って、少しずつ真理に近づいていくこととする営みだと思っています。

では、科学はどのようにして真理に近づいていくのでしょうか。

その第一歩は、「疑うこと」から始まります。

「みんなはAだと考えているけど、本当かな？」

「なぜ、こんなことが起こるのだろう？」

自然科学であれ社会科学であれ、科学的な態度を持つ人は、まわりの意見を鵜呑みにせず、それが本当かどうかと疑い、「なぜだろう？」「どうしてだろう？」と問いを發します。

問いを發したら、次にその解答（回答）のための仮説を立てます。科学という営みでは、それぞれの学者が仮説を立て、それを

検討していきます。仮説というのは、文字どおり「仮につくりあげた説明」なので、A。つまり、「検証」しなければなりません。

検証にはさまざまな方法があります。わかりやすいのは実験することです。実験をしてみて、仮説が裏づけられれば、その仮説は真理に近い説明だということができそうです。それでも、当然、仮説とは異なる実験結果が出てくることがあります。

仮説どおりの実験結果が出ない場合は、仮説を修正しなければなりません。そして、修正した仮説が正しいかどうか、再び検証をしてみる。このように、^③仮説と検証を繰り返して、真理に少しでも近づこうとすることが科学という営みなのです。

ただし、仮説を検証する段階では、一人だけが実験に成功しても、その仮説は認められません。逆に言えば、誰でも同じ手順にもとづいて実験をすれば、同じ結果が出なければいけないのです。ですから「STAP細胞はあります」と言っても、世界中の学者が実験してみて再現できなかったら、その仮説は間違っているということです。

もちろん最初の実験は、一人で行うことが多いでしょう。その実験に成功したら、実験の条件や手続きを明らかにして、誰でも再現実験ができるようにする。再現実験でも、同じような結果が出た。そうなれば仮説は、とりあえずの真理として成立するということです。これが科学的な理論や法則ということになります。

教科書に載っている「法則」「理論」にしても、最初から一〇〇パーセント正しいものと認められていたわけではありません。多くの人がチェックを重ねるなかで、^④徐々に「正しい」と認められるようになっていったのです。

先に挙げた「万有引力の法則」にしても、一七世紀にニュートンが発見して以来、長い間「真理」として認められてきましたが、二〇世紀初頭になると、アインシュタインが提唱した重力理論に取って代わられました。アインシュタインは誰もが正しいと思っていた万有引力の法則を疑うことで、科学をさらに前進させたのです。真理とは絶対的なものではなく、「とりあえずの真理」なのです。

では、科学者はどのように仮説を立てるのでしょうか。仮説を立てるうえで重要なのが、物事を抽象化することです。

抽象とは、具体的な物事から共通する要素を抜き出すことをいいます。共通する要素を抜き出すためには、^⑤よけいな枝葉は切り捨てていく必要がある。つまり科学者が物事を観察するときは、よけいな要素を切り捨て、仮説になるような要素を抽象化してい

くわけです。

^⑥たとえば、リンゴの実が木からポトンと落ちた。ふつうの人なら「リンゴの実が落ちるのは当たり前だ」ということで、わざわざ立ち止まって考えないでしょう。でもニュートンのような科学者は、リンゴが落ちるのを見て、「なぜ物は上から下に落ちるんだろう？」と疑問を持って、ここから物が落ちる理由について仮説を立てるわけです。

このとき科学者は、リンゴが落ちるという運動に注目しています。ですから、リンゴの色や香りという枝葉は捨てていることになります。そうやってさまざまな物が落ちる運動に着目し、その理由を考える。あるいは、月は落ちてこないのか、その理由も考えてみる。こうして具体的な物事を抽象化することで、万有引力の法則に行き着いたのです。

このように、ニュートンはリンゴが落ちるのを見て、万有引力の法則を発見したと言われています。でも、このエピソードは本当でしょうか。検証していくと、じつは相当あやふやなことになってきました。

ニュートンが教えていたケンブリッジ大学トリニティカレッジの入り口のところには、万有引力の法則を発見したときに落ちてきたリンゴの子孫の木が植えられています。観光名所にもなっていますが、これを見ると、ますます先のエピソードが真実味を帯びてきますね。

ところが調べてみると、「私はリンゴの実が落ちるのを見て万有引力の法則を発見した」と、ニュートン本人から直接聞いた人はいません。じつは、ニュートンの姪の話を聞いた人が情報元なのです。ニュートンが本当にそう言ったかどうかは確実とは言えません。後世の人が面白く物語にただけかもしれないのです。

このように、科学的な態度とは、疑問や問いを持って物事を見るところです。そして、観察した物事を抽象化して仮説を立てることが、科学という営みの最初のプロセス（注・物事が進行・変化していく一連の道筋）です。

しかし、この仮説を立てるときに、私たちがよくやりがちな失敗があります。それは、^⑦相関関係と因果関係を取り違えてしまうということです。相関関係とは、二つのものごとが単にかかわり合う関係、因果関係とは、二つのものごとが原因・結果でつながる関係です。

二〇〇三年に、国立教育政策研究所が、X 毎日朝食をきちんと食べている子どもは成績がいいという研究結果を発表しました。なぜ、そんなことがわかるのでしょうか。

毎年、文部科学省は全国学力テストを実施^{じっし}していて、テストと同時にアンケートも取っています。テストの結果とアンケートを照らし合わせてみると、Y 成績のいい子どもの多くが、毎日きちんと朝食を食べていることがわかりました。この結果から、「朝食を食べると、子どもの学力が上がる」と主張する人が出てきたのです。

そういう人は、朝食を食べるとききちんとした栄養が体内に入って、脳にエネルギーが送られ、それによつて午前中からしつかりと勉強に集中することができると、学力が高くなると考える。つまり、朝食と学力の間に因果関係があると考えたわけです。

たしかに、朝食を食べたほうがいいに決まっていますが、これを本当に因果関係と言えるのでしょうか。深夜遅くまでダラダラと起きていれば、朝、ギリギリに起きて、朝食を食べる間もなく学校に行ってしまうでしょう。

では、規則正しい生活をしているのはどういう子どもでしょうか。おそらく、そういう子どもには、B 親がいるのではないのでしょうか。そういう親は、朝食をきちんと食べさせるだけではないでしょう。それ以外に、「勉強しなさい」と言ったり塾に通わせたり、子どもの学習に積極的にかかわる親も多いかもしれない。そうすると、親のしつけと学力という因果関係も考える必要が出てきます。

あるいは、学校の先生が「きちんと朝食を食べましょう」と、生徒に指導をしていたら、どうでしょうか。こういう先生は、子どもの指導に熱心だから、C ではないのでしょうか。この場合、先生の熱意と学力との間に因果関係がある可能性もあるわけです。

つまり、「朝食を食べること」と「学力が高い」の間には、相関関係があるとは言えるかもしれませんが、しかし、⑧ 「朝食を食べるから学力が上がる」という因果関係があるとまでは言いきれないということです。

(池上彰『はじめてのサイエンス』による)

問1 — 部①「科学とは何でしょうか」という問いかけに対して、筆者はどのような言葉で答えを示していますか。——部①を受けての答えとなる一文を、本文中から探し、その初めの十字をぬき出して答えなさい。

問2 A に入れるのにふさわしい言葉を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一時的に通用するものではあっても真理ではありません

イ その仮説を立てた人でさえ正しいとは思っていません

ウ それが正しいかどうかを確かめなければなりません

エ 多くの人々に知られるだけの力を持っていません

問3 — 部②「ない」と同じ「ない」を含む文を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア インターネットがない環境でも、それほど困らない。

イ 携帯が水に濡れて、動かない状態になってしまった。

ウ 我ながら情けない戦いぶりで、ほとほといやになる。

エ 正確でない数でも、およその数が分かれば大丈夫だ。

問4 — 部③「仮説と検証を繰り返して」とありますが、仮説と検証が繰り返される必要があるのは、なぜですか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 最初の実験で仮説が正しいことを裏付ける結果が得られるなど、実際はありえないから。
イ 仮説の正しさは、様々な角度から行われる数種の実験によって裏付けられるものだから。
ウ 同じ実験でも何度でも繰り返し返さなければ、仮説の正しさを裏付けることはできないから。
エ 仮説は実験結果による修正が重ねられることで、正しさが裏付けられるものになるから。

問5 — 部④「徐々に『正しい』と認められるようになっていった」とありますが、公表された学説（仮説）が世の中に「正しい」と認められるようになるためには、ということが必要ですか。本文中の言葉を使って、五十字以内で答えなさい。

問6 — 部⑤「よけいな枝葉は切り捨てていく必要がある」とありますが、この後の具体例で、ニュートンは何を切り捨てたのですか。その答えを示した次の文の I・II にふさわしい言葉を、本文中からそれぞれ指定字数で探し、ぬき出して答えなさい。

I（五字以内）「という運動に共通する理由を考える際に、考慮する必要のない II（十字以内）。

問7 — 部⑥「たとえば、リンゴの実が木からポトンと落ちた」から始まる段落（形式段落）は、誰もが知っているニュートンの有名なエピソードについて述べていますが、このエピソードもまた疑うべきものであることを明らかにしている段落（形式段落）を、本文中から一つ探し、その初めの十字をぬき出して答えなさい。

問8 — 部⑦「相関関係と因果関係」とありますが、本文中の X・Y は、それぞれそのどちらを示していますか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X が「相関関係」、Y が「因果関係」を示している。
イ X が「因果関係」、Y が「相関関係」を示している。
ウ X と Y の両方とも「相関関係」を示している。
エ X と Y の両方とも「因果関係」を示している。

問9 B・C に入れるのにふさわしい言葉を、それぞれ十五字以内で考えて答えなさい。

問10 — 部⑧「朝食を食べるから学力が上がる」という因果関係があるとは言いきれない」のは、なぜですか。その答えを示した次の文の I・IV にふさわしい言葉を、本文中からそれぞれ探し、I はその初めと終わりの十字を、II・IV は表示された指定字数でそのまま、ぬき出して答えなさい。

「朝食を食べる」とことと「学力が高い」ことを直接結びつけた場合は、I といった理屈をつけて両者の関係を考えがちであるが、両者の間には直接の関係がなく、どちらも、家庭での II（五字以内）や学校の III（五字以内）といった背景とだけ IV（二字）関係を持つものである可能性についても、考慮しなければならぬから。

問11 筆者の「科学の営み」についての考えをまとめた次の文章の [] にふさわしい言葉を、本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。

科学の営みは、一つの「法則」「理論」を発見したことで終わるものではない。真理は絶対的なものではないので、[]
ことが科学を前進させる上で大切なことなのである。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば一九九九年に空から魔王が降ってきて（注・かつて一九九九年に人類が滅亡したり、破滅的な出来事が起こったりするのではないかと
いう予言が評判になったことがあった）、映画『マッドマックス』（注・暴行や殺りくが横行する近未来が舞台のアクション映画）みたいな近未来を
生きる運命に陥った場合、父がもしまだいれば、私たち家族は何とか生き延びることができると思う。

そのように娘の私に思わせるといふ一点で、父は立派に父親だったといえるのかもしれない。

もともと父のそういうところは、必ずしも美点として捉えきれない。お金をかけてトランプをするとき、①「親」になった父の手
もとに、例外なくいいカードが集まったものだ。ある目標を達成するための父の情熱と器用さは、狡猾さ（注・ずる賢さ）に裏打ちさ
れて刷り込まれてもいるようだ。

父の夢をときどき見る。夢の中の父は、当然のように生きている。夢の中の私は、父が死んだことを承知しているけれど、父が生
きて、昔のように一緒にご飯を食べて、大声で喋っているのを、不思議には思っていない。「チチのことだから、うまい具合に生き
返ったんだなあ」と考えているのである。

父が死んでこの五月で六年になる。

うちには神様がいる。

父が死んだ後、調布の実家の一階を母の住いとし、二階と三階を四世帯のアパートに改造した。当時、私は家を出ており、上北沢
で二人暮らしをしていた。しばらくして、私と同居人は経済的に逼迫（注・追いつめられて余裕のない状態になること）してきたが、彼の
仕事の便などから、実家のアパートに住むことは考えず、家賃の安い西新宿のボロアパートに引越した。

母が致命的な病氣に見舞われたと知らされたのは、西新宿に引越して三週間目のことだった。医者によれば、かなり進行していて、
一年もつかどうかという。②私は慌てて、同居人とともに、そのとき一部屋だけ空いていた実家のアパートに移った。

③特筆すべきは、父の死後、二年と経たない母の罹病（注・病氣にかかること）（しかも病名、発症部位ともに父と同じ）を知ったほ

とんどすべての人が、「父の仕業に違いない」と、しみじみと呟いたことだ。「まったくもう、④我儘ねえ、光晴さんは」といった言葉が、ごくナイーブに取り交わされた。

同じ思いは、もちろん家族にもあって、当の母に到っては諦めたというより悟ったような態度だった。夫婦間の愛情というのはちよつと違った表情の悟りであったように思う。早くも「みなしご」になる危機にさらされた私と妹にしても、嘆き悲しみながらも、心のどこかで、「チチがそうしたいなら、仕方ない」と思っていた。

そして先にも書いた通り、父権が意外なほど幅を利かせていた家に育った私たちは、「チチが決めたことなら、まあ何か意味があるんだろう」とまで、ぼんやりと思ひ至ることすらあったのだ。

この話にはオチがある。母は希有な（注・めったにない）誤診を受けたのだった。奇妙な場所にできた結核を、医師が悪性の腫瘍と見誤っただけのことで、正体がわかると投薬だけでA 治ってしまった。

ここに到って、⑤父への嫌疑はいつそう濃厚になった。「⑥父のあの世での尽力で母は助かった」と考える人が誰もいなかったのはどうしてだかわからないが、安堵とともに皆の舌鋒（注・するどいものの言い方）はむしろ陰しくなつて、「嫌がらせ説」「自分の存在アピール説」などが浮上した。

私は「しまった」と思つたけれども、短期間内の度重なる引越しのために、すでに実家のアパートから移動する経済力と気力はなかった。独り暮らしの母の元へ娘を呼び返す父の策略にB はまった体だった。

それから月日が経った今、私は一人でその部屋に寝起きし、夕方になると階下へ下りて母とともに晩酌するという生活を送っている。妹は陶芸の修業をしに行った瀬戸でなぜかイタリアンレストランのシェフとして採用され、便りには「ろくろを回さずにピザを回しています」とあった。

折々の分岐点でどっちへ行くべきか自ら決断しているのはたしかなのに、事態が決定してしまえば、「ま、チチがそう思うならこれでいいのよね」と自分の中に納めている。昨年夏は私自身が体調を崩し、ほぼ一週間七転八倒の苦しみを味わったが、その最中にも「チチが意味もなく私をこんなに痛めつけるはずはない。案外この経験のおかげで、私、すごい名作が書けるようになるのかも」と

胸の中で唱えたものだ。念仏のように。

父の写真が今私の仕事机の前に貼つてある。溜息を吐きたくなるような出来事に見舞われたとき、⑦写真の父の表情を窺い、「いや」と笑つたのを確かめて諦める。そういえば父が他界する前、同種の役目を負っていたのは子供の頃から持っている猫のぬいぐるみだった。

（井上荒野『夢のなかの魚屋の地図』による）

問1 A・Bに入れるのにふさわしい言葉を、次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さらつと

イ せつせと

ウ まんまと

エ すとんと

オ けろりと

問2 部①『親』になつた父の手もとに、例外なくいいカードが集まつたのは、なぜだったと今の「私」は考えていますか。

その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 勝つという目標にかける情熱が、自然にいいカードを父の手もとに引き寄せたから。

イ 最悪な状況でも生き延びられると思わせるような、運の強さを父は持っていたから。

ウ トランプのような他愛ない遊びにおいても、父の器用さは遺憾なく発揮されたから。

エ 抜け目のない父は、「親」の特権を利用していいカードを手もとに確保していたから。

問3 — 部②「私は慌てて、同居人とともに、そのとき一部屋だけ空いていた実家のアパートに移った」とありますが、「私」がそのようなしたのは、どのような思いからですか。三十字以内で答えなさい。

問4 — 部③「特筆すべきは」とありますが、この段落（形式段落）で「私」は読者に対して、何を強く伝えようとしていますか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母が父とまったく同じ病気になる、早くも「みなしご」になる危機にさらされた、「私」たちの大きな驚きと不安。
イ 母の病気をくわしく知らされた人々が、死んだはずの父を今なお生きているかのように感じてしまった不思議さ。
ウ 何事も思い通りにしようとした父の強烈な個性が、父の死後二年近く経った今でも人々の心に刻まれていたこと。
エ 偶然が重なったにしては話がすぎている、母が病名も発症部位も父と同じ病気にかかってしまうという神秘。

問5 — 部④「我儘ねえ、光晴さんは」とは、父（光晴さん）を知っている人が、父のどのような思いを感じて発した言葉だと考えられますか。「という思い。」に続くように、二十字以内で答えなさい。

問6 — 部⑤「父への嫌疑」の説明としてあてはまらないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父は、一人暮らしの母の元へ娘を呼び返してあげようとしていたのではないか、ということ。
イ 父は、私たちが嫌な思いをして困った顔をするのを楽しんでいたのではないか、ということ。
ウ 父は、自分の存在がいかに偉大だったかを思い出させようとしたのではないか、ということ。
エ 父は、自分が死んだあとの家族はどうなってもよいと思っていないか、ということ。

問7 — 部⑥「父のあの世での尽力」とは、どのようなことだったと考えられますか。その答えとしてふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 悪性の腫瘍とされていた病気を、投薬で簡単に治るものに変えたこと。
イ すぐに治る程度の病気を、致命的なものと医者に思い込ませたこと。
ウ 自分と同じ病気と診断されるような、奇妙な場所に結核を作ったこと。
エ 最初に医者に誤診させた上で、実はすぐ治る病気だと明らかにしたこと。

問8 — 部⑦「写真の父の表情を窺い、『にや』と笑ったのを確かめて諦める」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 「私」は「写真の父」をどのような存在だととらえていますか。その答えとなる言葉を、本文中から探し、ぬき出して答えなさい。

(2) 写真の父が『にや』と笑ったのを確かめることが「諦める」ことにつながるのには、なぜですか。その答えを示した次の文の[]にふさわしい言葉を、本文中の言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

筆者は、父が笑ったのを確かめて、[]と考えることで、納得して諦めることができるから。

〔第Ⅰ期〕 国 語

6	1
7	む
8	す
9	む
10	5

【一】

【二】

問 1

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

I

II

問 7

問 8

問 9

B

C

問 10

I

Ⅰ

II

III

IV

問 11

【三】

問 1

A

B

問 2

問 3

問 4

問 5

問 6

問 7

問 8

(1)

(2)

という思い。

下のらんには何も書かないこと

J	I	H	G	F	E	D	C	B	A

受 験 番 号
.....